

学生海外調査研究	
中国大学における日本語を専攻している学習者の会話教育の実態 —日本語中上級学習者を対象に—	
秦 松梅	
比較社会文化学専攻	
期間	2013 年 10 月 22 日～2013 年 11 月 1 日
場所	中国黒竜江省ハルビン市
施設	ハルビン A 大学

内容報告

1. 海外調査研究の背景

近年、中国における大学教育の大衆化に伴い、日本語を専攻とする学習者が年々増えている。国際交流基金の海外日本語教育機関調査によると中国における日本語学習者の全体数は世界第一位で中・上級段階に達する学習者が非常に多いということが特徴¹である。グローバル化の進む現代社会において、人的交流がますます頻繁になり、中国の大学の言語教育においてもコミュニケーション力の養成が重視されるようになった。大学の日本語教育において、日常会話、運用能力の応用に直接関連している授業は会話授業である。会話授業の目標²は仕事や日常における実際のコミュニケーションにすぐ役に立つような日本語力を身につけることが目標となっている。しかし、中国の大学で日本語を専攻³している学習者は精読の力⁴は優れているが、運用能力がついていない(堀口 2003)、豊富な語彙量、高度な文法知識を持っているにもかかわらず、簡単な日常会話も流暢にできず、運用能力が非常に低い(楊 2006)という指摘があった。知識があるのに運用ができないという問題の背後には様々な要因があると考えられる。社会の急速な変化によって、学習者の多様性、学習者のニーズ変化、学習者の意識変容など新たな課題になった。中国の大学における会話授業を焦点にしてコミュニケーションの鍵を担う会話授業のより良い改善策を立てる前に、日本語会話授業の実態を明らかにする必要があると考えられる。

そこで、本報告は中国における大学の日本語中上級学習者を対象に調査を行い、日本語専攻における会話教育の実態を明らかにすることを目的とする。中国の大学においてどんな会話授業を行っているか、教師はどのように教えているか、学生達は会話授業に対してどのような希望を持っているかを明らかにしなければ、問題点をよりよく改善することは不可能であると考えられる。会話授業の実態を明らかにすることで、学習者中心の会話授業の改善案がよりよく考えられ、中国での日本語教育への示唆を得ることが期待できると考えられる。

2. 本調査研究が博士論文における位置づけ

本報告者の博士論文では言語生態学を理論として中国の大学日本語教育における会話授業のモデルを提案することを目的としている。以下五つの研究を行う予定である。

研究 1 は生態学的リテラシーの育成のプロセスの実態を探る。

題目：中国の大学における日本語を専攻している学習者の会話教育の実態—日本語中上級学習者を対象に—

研究 2 は当事者の評価を大切にして、新たな会話授業のデザインに対して日本語母語話者と中国人日本語学習者両方から調査する。

2-1 題目：中国人学習者は事前課題と日本語母語話者の参加を取り入れたグループワークによる内容重視の会話授業をどう受け止めたか—中国の大学における日本語専攻クラスの場合—

2-2 題目：内容上の事前準備は会話参加をどのように促し支えるか—中国の日本語専攻大学生を対

象とした会話活動におけるやりとり分析から－

2－3 題目：中国における日本語専攻会話授業で学習者としての日本語母語学習者を導入した場合、日本語母語話者は何を得たか－内容重視の会話活動においての学習者同士のやり取りから－
研究3は中国における生態学的リテラシーの育成をめぐる日本語会話教育の可能性を研究する予定である。

題目：卒業1年後に内容重視の日本語会話活動に参加した学習者に対してどのような影響があるか最後に研究1から研究3までの結果を博士論文にまとめ、その結果から得た知見から生態学的リテラシーの育成をめぐる日本語会話教育のデザインへの提起をする予定である。

今回の調査研究は研究1である。博士論文の研究結果と実際の教育現場での指導に結びつく重要な一環になる。さらに、博士論文執筆の展開において、大きな意義を持っている。

3. 先行研究

長坂・木田（2011）は非母語話者日本語教師研修における、教授法授業の会話指導の内容を再考することを目的に、中国の大学で日本語教育に携わる非母語日本語教師 85 名を対象に無記名の質問紙調査（選択・自由記述）を実施した。海外では日本人との接触や、生の日本語を取り入れる機会は限られている。その海外で中・上級話者を生み出している高等教育機関の教室現場では、大学の非母語話者日本語教師が、どのようなことを目的に会話授業に行い、どのような教室活動を実施しているのか、また、どのような教室活動が会話力向上に貢献すると考えられるか、中・上級会話指導における困難点は何かなどについて調査を行った。その結果、まず、教師が会話授業において仕事や日常での実際のコミュニケーションにすぐ役に立つような日本語力を身につけることが目標となっており、実用志向が強いことが分かった。次に、中国の大学における会話授業で行っている教室活動では学習者の発話の自由度の低い、音読、翻訳、繰り返し、暗記、聞き取りなどが上位を占めている。学習者の考えや意見を表す自由度の高い活動で上位を占めたのは、原稿を用意するスピーチ、自由な会話文作成と発表、ロールプレイを「よく、時々」実施し、意見や感想を述べたり、説明や描写を学習者が行ったりする自由度の高い活動は実施率が低くなっていることも分かった。さらに、会話指導の難点について本人の考え方や日本語として自然な表現を教えることが難しい。また、授業の指導方法、学習者の動機や意欲を強めることや、覚えた表現を実際に使い、自分の考えや意見などを話させることが難しいということが分かった。これらの結果から中国の多くの若い学習者にとって興味・関心のある素材が、教室活動にはまだ取り入れられていないことが窺える。また、学習者主体の会話活動を行っていないことが分かった。

そこで、会話は人を主体して変化しているものであるから、会話をする人は自分の置かれている現状及びその現状をさまざまな角度から考えながら言いたいことを言語化していく過程は大切であると考えられる。本調査研究では、調査を実施する大学で会話授業のやり方、学習者の生活状態及び学校での日常生活も含めて参与観察の方法で必要な情報や資料を収集した。さらに、中上級の日本語を専攻している学習者と会話授業を担当している教師両方を対象に、半構造化インタビューを行った。これらの調査を通して、中国の大学における会話授業の実態を明らかにする。

4. 研究目的・課題

研究目的：中国の大学における日本語専攻会話活動の実態を明らかにして、今後の会話活動のあり方について示唆を得ることを目的とする。そのため、研究課題は以下のように設定する。

研究課題：

- (1) 中国の大学においてどんな会話授業を行っているか。
 - 1-1 教師はどのように教えているか。
 - 1-2 学習者はどのように会話授業に参加しているか。
- (2) 学習者は会話授業に関してどんな希望を持っているか。

5. 研究方法

5.1 フィールドの概要：

今回、調査研究を行った場所は黒龍江省直轄の理工系を主体として経済学、文学、法学などの学部も備える総合大学 A である。A 大学の日本語科は 1991 に年創立され、20 年の歴史を持ち、インタビューを行った当時、日本人教師は 4 名である。日本語科に在籍していた 530 人の学部生の中で日本語を専攻している三年生の学部生は 120 人であった。本報告者は 2013 年 10 月 23 日から 11 月 1 日の間に、中国黒龍江省 A 大学の日本語科の了承を得て、会話授業がある学部三年生を対象に、在籍している中国人日本語専攻学習者 10 名を募集した。学習者の日常生活に影響しないように学習者の授業外の時間を調整した。1 人につき、約 40 分から 60 分程度で、学習者が学校でいつも利用している教室において中国語でフォローアップインタビューは半構造化インタビューをフォローアップインタビューとして起こった。また、A 大学の普段の会話授業の様子を知るために、異なるクラスの会話授業を見学できた。担当教師の了承を得て授業中のやりとりの録音をした。A 大学の 2 人の日本人先生の協力を得て、日本語で半構造化インタビューも行った。学習者及び日本人先生の同意を得たうえで録音をし、全て録音の文字化資料を分析資料とした。

表 1 「A 大学の調査対象者の内訳」

番号	学習者(仮名前)	性別	学年
1	WS	女	3 年 5 組
2	LM	女	3 年 5 組
3	YN	女	3 年 1 組
4	SF	女	3 年 2 組
5	WQ	男	3 年 2 組
6	WF	女	3 年 1 組
7	WH	女	3 年 5 組
8	WX	男	3 年 5 組
9	LQ	女	3 年 2 組
10	WJ	男	3 年 5 組

5.2 半構造化インタビューの内容

学生にインタビュー内容	教師にインタビュー内容
1 クラスの中に何人いますか。会話授業の開始時期及び一週間当たりの時間数、担当している教師は日本人ですか。その授業はどうですか。	1 一週間当たりに担当している授業のコマ数を教えていただけますか、また、現在使用している教材は何でしょうか。
2 普段の会話授業に参加する目標は何ですか。その流れを教えてください。	2 会話授業でどのような目標を持っていますか。その目標を達成するために、どのような工夫をしていますか。また、その困難点がありますか。
3 普段の会話授業で話し合ったトピックの内容は何ですか。面白い授業はありますか。どんな内容ですか。その内容についてどう思いますか。つまらない内容はありますか。どんな内容ですか。	3 会話授業はどのように行っていますか。よく取り入れる内容（トピック）は何でしょうか。
4 どのように教えられましたか。自分はどのように参加していましたか。	4 何故その内容を選ばれましたか。
5 今後、会話授業においてどのような活動がしたいですか。どんな内容を会話授業で話したいですか。	5 今後の会話授業はどのように行う予定でしょうか。(今後の会話の授業について、先生はどのようにお考えでしょうか。)
6 教室外で日本人と日本語で話したことがありますか。	

5.3 分析方法

今回の調査研究では、学習者は会話授業に関してどんな希望を持っているかを主に見ることとする。そこで、学習者の希望の全体図を見るため、インタビューデータを基に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下 2003、以下 M-GTA とする)を援用して課題を質的に分析する予定である。なお、分析の際には、教師のインタビューデータや普段の会話授業の録音データ、報告者の観察なども参考にした。M-GTA では質的データの解釈をしながら分析を進める予定である。

6. まとめ

このたび、平成 25 年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援をいただき、調査研究を行われること、心より感謝を申し上げる。

従来のように一斉授業や教師主導など教える側の経験や固定化した教授法によって教育は行われる困難であることはいけなくなる。岡崎他 (2001)はどのようなタイプの学習者にも有効な「唯一絶対の教授法」を求めてもそれは現実的ではないと考えられるようになったと述べている。例え、同一授業に対しても教師と学習者の言語観や学習観が異なることも考えられる。池田他 (2007) は、日本語という言語を、日本語を母語としない人々に教える時、何をどのように教えるのかがよいのか、という日本語教育における言語教育観も時代とともに変化してきた。それをあえて一言で言うとしたら、言葉を教えるということは、「学び手に言語構造を中心とした知識を伝達することだ」という考え方から「学び手が、実際にコミュニケーションができることに加え「学び手が自らを発見するために日本語を使い、また日本語を自律的に学ぶことができるように支援することだ」という考え方に移ってきた。教師の関心も、それに伴って「言語の仕組み」から「教え方(教授法)」へ、さらに、学習者の学びとその支援へと移ってきたと考えられる。

今回の調査研究において筆者の観察と学習者及び教師のインタビューデータを通して中国の大学における会話授業の実態を明らかにすることで、次の会話授業の実践においてのデザインや教案の準備が強く繋がっていると考えられる。これから、今回の調査研究で得られた貴重なデータを分析して、得られた知見を中国における日本語教育現場にどのように活かすかを考えていきたい。なお、今回の調査研究にあたっては多くの方々からあらゆる面で助力を頂き、そのおかげで今回の調査研究を大変充実したものにすることができた。改めて御礼申し上げます。

7. 今後の課題

今回の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムで得られたデータは、現在まで収集した資料やデータなどを加え、2015年の国際学術大会で発表する予定である。その後、査読論文の形で公表するとともに、現在執筆中の博士論文の一部として組み入れ、本海外調査研究の成果とする予定である。お茶の水女子大学の2015年日本語言語文化研究学術誌や『人間文化創成科学論叢』等に投稿する予定である。

注

¹国際交流基金「海外日本語教育機関調査」2012 年参照<<http://www.jpff.go.jp/>>国際交流基金「日本語教育国別情報 2009 年度」<<http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/china.html>>2010 年 9 月 8 日参照

²中国の教育部によって制定された教育指導要領「大学日本語専攻高学年段階教育大綱 2001」会話授業の目標には、仕事で日本語を使えるようになること、日常会話ができるようになること、自由に流暢に話すこと、日本人とのコミュニケーションできること、学んだ知識を運用して話すことが挙げられている。

³尹松 (2002) は中国の大学における日本語教育は、日本語を専攻とするかどうかによって 2 種類に分けられている。ひとつは日本語を主専攻とする「日本語専攻」であり、もうひとつは第一外国語や第二外国語として学習する「非日本語専攻」である。本研究では日本語を主専攻とする「日本語専攻」について調査を行っている。いずれも大学に入って初めて日本語を学習する学生である。

⁴精読の力というのは読み書き能力である。

参考文献

- 岡崎眸・岡崎敏雄（2001）『日本語教育における学習の分析とデザイン—言語習得過程の視点から見た日本語教育—』凡人社
- 池田 玲子・舘岡 洋子（2007）『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房 43.
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 楊小雁（2006）「コミュニケーション重視の教室活動の展開—『総合日本語』の授業の改善を目指して—『日本言語文化研究開論集』2、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学, 31-49.
- 長坂水晶・木田真理（2011）「中国の大学の日本授業における会話指導に関する調査—中・上級レベルを対象とした今日知る活動の実態と教師の意識—」日本語教育紀要7 国際交流基金, 43-57.
- 堀口純子（2003）「中国の大学における日本語教育の最近の動向」『明海日本語（8）』明海大学日本語学会, 11-19.

しんしょうばい／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

指導教官によるコメント

秦松梅さんは貴プログラムの支援を受けて、中国国内での会話授業の実態に関する半構造化インタビュー調査を行いました。調査対象者は学習者 10 名、日本語教師 2 名です。今後は、これらのデータを M-GTA の手法で質的に分析する予定です。

秦さんの調査の特色は、これまでの中国会話授業に関する多くの研究が量的調査をもとした研究であったのに対し質的調査を行った点、学習者と教師双方に同様の調査を行った点にあり、より深く中国の日本語会話教育の実態に迫るものです。調査結果を学会発表や投稿論文としてまとめ広く公開していくためにデータの整理、分析を現在行っているところです。

今回の秦さんの調査は、博士論文の一つの柱を構成するものとなる（もう一つの柱は実際の授業分析から得られた知見です）貴重なデータを収集できた点、実際のコミュニケーション場面で役に立つ日本語指導への貢献が期待される点で高く評価されます。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻 佐々木泰子）

Japanese Conversation Education in Chinese Universities —the Case of Advanced Japanese Learners who Major in Japanese—

QinSongmei

The author has got the funding from the Project of “Student Overseas Visits Project”, through the “International Research Program for the Advancement of Women in Leadership” program.

Through this research, I would like to clarify the actual conditions of Chinese universities’ Japanese major’s conversation activities. By analyzing these data collected from the practical study, I intend to provide recommendation for the conversation classes. I gathered almost all the important information concerning this area of my research. The data will be summarized and analyzed in a statistical way to get the scientific and significant results.